芥川龍之介の人生観

李翠翠

（河北北方学院）

はじめに

芥川龍之介の「鼻」は、私がはじめて読んだ日本の小説である。彼の文章はユーモアたっぷりである。(*1) おもしろくかつ教訓的である。芥川の小説を読むたびに、常々私は不思議だと思っている。不思議なことには、彼は人に対して、人間性にたいして、どうしてそんなに深く理解できるのか。こまごまと煩わしい日常生活の中から人間性をあんなに深く分析し、それで透徹していることができるのか。不思議なことだと思う。芥川は新現実主義の作家として研究する価値があることはいうまでもない。

１　芥川龍之介の紹介

芥川龍之介のもとの名前は柳川隆之介である。俳句についても得意である。俳人としての号は「我鬼」である。東京生まれ。もとの姓は新原である。父親はミルク業を経営する。生まれて９カ月の後、母親は精神が異常になった。養子として、芥川という姓に変わったのである。芥川の家族は封建的な一族である。芥川は中学時代に江戸文学に憧れる。「西遊記」や「水滸伝」なども読んだことがある。日本近代の作家、泉鏡花、幸田露伴、夏目漱石、森鴎外の作品も同様に好きである。１９１３年、東京大学英文科に入る。その間、久米正雄、菊池寛らと「新思潮」を復刊した。文学の新しい風潮が文壇に出るようになった。

芥川龍之介は新思潮派の代表的な作家である。新思潮派は大正中期から昭和初期まで、白樺派の後の文学流派である。この流派は、日本市民は現実に対して不満の気持ちを持っても解放できないという主張をした。(*2) 芸術上で長い間、日本文壇の主流であった自然主義を越え、社会現実を正視し、ロマンチッ

クに富みつつも現実主義の特長を持っている。早期の作品は歴史小説を主として、古代の教訓を借り、今の情況を批判する。末期の作品では彼は貧富の違いの社会現実に関心を持つ。２０年代末期、日本社会の階級闘争はますます鋭くなる。芥川は自身の矛盾と無力に気が付き、「未来に対してぼんやりした不安」のため、結局、元気を失って自殺という道を選んだのである。(*3)

短い１２年の創作活動で、芥川は１４８篇の小説、５５篇の小品、６６篇の随筆、および大量の評論、紀行文、読書メモ、詩歌などを書いた。(*4)それぞれの小説、内容と芸術工夫はそれぞれの特長をもつ。これは創作するときに、絶えず探索した結果である。

彼の文章の風格は典雅であり、技巧は熟練している。ユーモアはあふれ、独特の風格がある。日本の大正時代の作家の中で重要な地位を占めている。芥川を記念するために、１９３５年から彼の名前によって、芥川文学賞は作られた。日本の優秀な青年作家を奨励する最高文学賞になった。

芥川龍之介の小説を読むたびに、雷に当たった感覚がある。彼の文章は特に人の精神を震撼させる。中国魯迅先生の文章と似ている。「羅生門」、「地獄変」はその中の代表的な作品である。描写する場面は冷酷である。作者は冷静になって、黙って「鬼の才」の才気を示すことができる。

芥川の自殺は彼の人生観と分けることができない。芥川の人生観の形成は、明治時代から大正時代までの激動に満ちた間のことであった。個人、家庭、社会の三方面の状況は彼に人生苦悩の深淵に踏み込ませた。それと同時に彼は現実の醜さを耐えられなかった。人生の傍観者として、彼はまたどうしても精神上に合理主義で自分を武装したい。自分は精神上の強者になることを熱望していた。彼は資本主義、道徳、現代社会の種々の束縛に主義と戦うことを通じて、運命を変えるということを信じない。芥川龍之介は悲観主義者である。彼は人間の醜さを見た。心は悪の深淵から浮び上がろうとしても、かえってますます沈んでいく。彼にとって、人間の存在および生活自身は矛盾に満ちていた。人々はその矛盾からそう簡単に脱出できなかった。この世界の中に、かなり善良な真心が存在しても、芥川の精神世界の中では、善良であることは最終的に醜悪

に勝つことはできなかった。人生に対する消極的な処理、および現実の醜悪に対しては無力の感じで、芥川の悲観的退廃的な人生観は育成された。芥川の人生観は彼の小説の中で詳しく表現されたのである。私たちは彼の作品の中に彼の考え方の軌跡を探索することができる。

２　芥川龍之介の人生観

（1）エゴイズム

エゴイズムというものは、人は世界の中に生きていて、いつも自分のための利益と考える。無意識のうちに自分のためだけで考える。たまにはうそをも作ることを惜しまなく、自分の目的のために他者を中傷し、無意識のうちにすぐ自分の利益を最上位におく。

荀子は以前、人間の本質は悪だという見方を提出したことがある。この観点は多くの作家の創作によって表わされてきた。中国古代楊朱の「人は自分のためだけに生きるものだ」はそのうちの典型的な代表である。利己主義は人の天性で、自分の私欲を満足するため、自分の私欲と他者の利益が衝突するときに、必然的に人類社会の中にある道徳の観念を放棄し、人間性の醜い姿に還元するのである。中国当代作家の中に、余華の多くの作品は人間性の悪の主題を徹底して表した。欧米作家の中に、フォークナー、カフカ、同様に人間性の醜さを描写する名匠である。それで日本では、人間性の悪を主題として、しかもこれによって、多くの著名な作品を作ったのは、私が知る限り芥川龍之介を除いていないということが明らかになる。

人間性の悪は世界の上での最も本質的なものである。この主題は芥川の作品にしばしば表現された。これは彼がこの世界に対しての唯一の観点である。世界は醜く、自分も同様に醜い。人間は目の前のものをみ、苦痛を生ずる。しかし、人はまた自分自身に苦痛を伴っていても生きていることを強いる。世界は醜く、生きている人間を苦しめる。こんな主題は芥川の人生と創作に大きな影響を引き起こした。これは彼がこの醜い世界を映している源と言える。

人間性の悪の主題を指摘した作品はたくさんある。特に芥川の作品は一番多い。人間の利己主義の存在、特に死に直面するとき、人間の利己主義は最も明らかに表現される。

「羅生門」は芥川の最も早く成功した作品である。飢饉の年に、解雇させられた一人の下人は羅生門の下に雨宿りをしたいた。どういうふうにして生きていくのかという問題を考えていた。もし生きていたいなら、ただ強盗になるしかない。もし強盗になりたくないなら、ただ餓死するしかない。考えていた時、一人の老婆を見た。その老婆は死人の毛をぬいていた。彼は非常に怒った。正義感を引き起こした。もし、この時、餓死するか強盗になるかを選ばせたら、たぶんためらわないで餓死を選んだだろう。ただし、老婆の言い訳を聞いた後、考え方はぱっと変わった。この話は下人を助け、彼は強盗になった。老婆の着るものと身の回りの品を剥ぎ、大手を振って立ち去る。つまり、人間の正義感と生きていくためのエゴイズムの間の葛藤を描いた。(*5)

人間は死に直面するとき、生きる道を求めて必然的に利己主義というものが出てくる。たとえば、この下人は強盗になることは決して彼の願いではなかった。そして、下人は結局一人の凡人であって、餓死を前にして、結局、良心と道徳を失ってしまうことになった。人間性の醜さが最終的暴露された。

「藪の中」は芥川龍之介の末期の作品であって、同様に最も芥川の風格を表現できる作品である。人々に誉められた著名な作品である。この小説は七人の供述をつなぎあわせて作ったものである。ただし、供述中一人一人の話は異なっている。さらに言えば、大変な隔たりがある。七人の供述中で、三人の主要な当事者の供述は最も重要である。ただし、三人の供述は相当の違いがあり、その上それぞれの話は全部論理的に成立できている。当然なことは、三人のうち、必ず誰かが真相を隠している。人間は嘘によって過ちを隠し、真相は常々に歪められ、客観の真理は認識し難い。人間は利己主義の私欲を持っているので、私欲は自分に不利なことを存在させ

たくない。私欲は、横暴な罪を犯すことを引き起こす。それ互いを恨みあわせる。この点から見ると、人々が獲得する結果は事実の本来の姿ではない。私欲は、人類が行ういろいろな罪悪のもとである。私欲はまた人間性の一部分であり、それは人間性の悪の表現形式である。第二次世界大戦後、日本の著名な監督、黒沢明によって、「羅生門」と「藪の中」を合わせて、映画「羅生門」を制作した。国際的な大きな賞を獲得した。この作品から、日本の映画は世界にみとめられることになった。

「地獄変」は人間性の利己主義と醜悪を余すところなく表現する。大公は傲慢、奢侈、淫蕩の本性を隠したまま、絵師良秀の娘の美貌をねらった。しかし、欲がかなわなくなると報復手段に出た。絵師の娘は最後に焼死させられる。これは人間の利己と醜悪から出るものである。絵師良秀は吝嗇で、欲が深く、世間体に頓着しない。ひたすら利益を追求する。自らその時代の第一の絵師と名乗った。ただインスピレーションを得るために、鉄の鎖で強く弟子の筋肉を絞って、蛇に弟子を噛ませ、フクロウに弱い弟子を襲撃させる。何といっても他人の命を大切にしない。人間は猿に恩恵を施すことができても、かえって人にはしたくない。人間性は利己的で、醜い本質を表現しだすことができる。

芥川龍之介が抱いている人間の悪の本性は小説表現の主題になっている。それらの非人道的な行為、歪んだ生命のあり様は恐れるべきものである。荀子と楊朱は人間の本性が悪であることと考え、ヘーゲルは性悪論は性悪論より合理的であるということを言ったことと重なる。

文学は人間性の文学である。人間の利己的な本性は生まれて持ってきたものである。それはいつでも人に伴って世の中に存在している。旧ソ連の学者の謝苗諾夫は大量の民族学と人類学の資料の研究を通し、以下の結論をつけた。動物の世界では、動物の個人主義は支配的な地位を占めている。人はいったん生死の瀬戸際に立ったら、動物の本能を回復し、人間性の醜悪は自然的に現れてくる。芥川の作品は命に関わる時、人間の醜悪な本性を誘発して様々な形態を描写し、それによって人間性の正体を表現するの

である。

（2）矛盾

矛盾というものは、人類と世界自身がすべて欠陥があるが、人類はまた完璧なことを期待し、欠陥を否定する。現実と夢との間の違いは矛盾であると思う。

フランスの実存主義の哲学者のサルトルはかつて人生が苦痛であって、世界は矛盾に満ちたという話を言ったことがある。世界の矛盾性を提示した。カフカの「飢餓の芸術家」の中で行った闘争はサルトルよりもっと激しい。「私はひもじい思いをすることしかできない。私は別の方法がない。私が自分の好きな食品をさがしだせなかったのである。もしも私はこのような食品を探し当てるなら、私はみんなと同じように腹一杯食べたいのである」という話を語ったのである。芥川龍之介は人生の矛盾性を表現する方面に全力を尽くしたので、彼の作品の中の矛盾性は人の心を驚かせた。あのような矛盾性は実に日常生活の中に存在するのでちょっと油断してその中に落ち込むと、逃れることはできない。芥川は世界の矛盾状態を描写する文章は少なくないのである。その中の短編小説「鼻」、「一塊の土」と「疑惑」は突出した作品だと称することがある。

「鼻」は芥川の出世作の一つであり、「今昔物語集」に基づいて創作したものである。主に鼻に関連した物語である。池尾の寺に禅智内供という和尚がいる。他人と異なる長い鼻を持っている。醜いだけではなく、自分の生活にいろいろな不便をもたらす。それゆえ常々に人に嘲笑される。このせいで和尚の自尊心は傷つけられ、彼は非常に苦しむ。彼は一生懸命いろいろな方法を考える。自分の鼻はやっと短くなる。しかし、周囲の人は彼の短縮した鼻をみ、かえって、大きな声で笑いだす。禅智内供はあれこれと疑い、いても立ってもいられない。後には、或る晩、鼻は腫れ、最後にもとの長い鼻になった。彼は肩から重荷を下ろしたかのように、嬉しくなる。

「鼻」は人の心理を浮き彫りにした。虚栄と虚偽と自尊心の弱さを明ら

かにした。同様に傍観者は他人が幸せになることを見たくない。人間の心には互いに矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はいない。ところが、その人がその不幸をどうにかして切り抜けることができると、今度はもう一度その人を不幸に陥れてみたい気になる。(*6) 人間の利己主義を風刺し、ただいっそう重要なものは人間生存の矛盾の本質を抉り出したことである。禅智内供の鼻は短くなってまた長くなり、心理は、苦悩一満足一後悔一喜びの変化を経験した。芥川はユーモア、誇張した手法をこの上なく発揮した。その深層の意味はさらに人に考えさせた。人間は完璧でない。誰でも欠陥があり、ただし、この欠陥は仮に解決しても、人々の心理は依然として存在する問題を解決しない。あるいは、一つの病気状態から別の病気状態に変わる。小説の中の禅智内供は実は人間の代表である。それで、長い鼻は、人間の完璧でないことを象徴している。完璧を望む願望と現実との間の矛盾が生じて調和できない。それゆえに人間の生存の世界は矛盾に満ちたと見えるのである。

「一塊の土」は芥川が実生活を描く作品の一つである。姑と嫁との日常生活を描く作品である。人間性という哲学的な課題に入る。お住と嫁のお民は病人の男の死んだことは「後生よし」という見方を持つ。ただしそれ以後、お互いに激励するが、相違があり、最後に敵になる。お住はお民に婿を招き、幸せな晩年を送ることを願った。しかしお民は強く反対する。なぜかというと、息子に残しておく遺産が他人に奪われることを恐れるからである。自分の期待する生活にならないので、お住はお民を罵る。お民は他人に誉められている。それに対して、お住は自家の嫁の劣るところを罵る一方である。そして、孫に自分の母を疎遠にさせる。偶然なことに、お民はチフスで亡くなる。葬式の後に、お住の気持ちはよくなる。これは彼女に９年前の夜を思い出させた。その晩はほとんど今日の気分と同じであった。その日は自分の息子の葬式であった。今日は自分の息子の嫁の葬式である。一瞬の間、お住の気分が悪くなった。しばらくするとお住は最も悲惨であったことを思い出した。お民の死にまた同情と悲痛が湧いてき

た。お住の一連の心理変化は同様に人間の生存の矛盾の状態を表現したのである。

「疑惑」は緊急状態で発生する事を描いたのである。突然やってくる地震、妻は棟の下に押しつぶされ、その後いっそう悲惨なのは火が燃え上がる。妻は焼き殺されなければならない。妻の死は避けられない情況の下で、妻の苦痛を軽減するため、中村玄道は自分の手で妻を殺すのである。その後、彼は数回みんなの前で自分の犯罪を自白しようと考えた。しかし実施していなかった。それから、彼が心の深い所からずっと妻を殺したかったのではないかと思う。妻は病気があるので、中村玄道は内心では彼女を嫌がり、これが更に自分を疑わせる。自分は以前からずっと妻を殺すことを企んでいたのではないかと思う。彼に再婚する時に接近し、ついにみんなの前で自分のすることを自白したのである。私が人を殺した。私の罪は万死に値する。自分の罪を認める中村玄道はみんなの目から見ると狂人に映った。実は深い意義からいい、このような疑惑は人類の疑惑である。人類の生存の矛盾性の体現である。偽りはよく他人の信用を得ることができ、真実は狂人の馬鹿気た話と見られる。このような矛盾性は人間性の深い所に入り込んだのである。

人は、世界にあり、矛盾した存在である。矛盾は世界の本質であるといえるだろう。どうしても正視しなければならない事実である。世界は矛盾に満ちて、生活は不合理で、理屈で納得させることができない。生はすでに苦しめることで、自身がそのとおり矛盾が存在する。人は矛盾に満ちた世界を理解できず、同様に自分自身を理解できない。人は矛盾の集合体である。ある種の芸術家の作品の中に表現された。たとえば、凡高の絵画や芥川龍之介の小説などである。

（3）醜さ

醜さというものはいつも善良と一緒に生存する。エゴイズムは醜さに属する。醜さの範囲はエゴイズムよりもっと広い。

善と悪は芸術家にとって表現したい二つの主題である。善と悪は一対の

ものである。それは人間性に共同で存在していて、その上、また途切れなく闘争していて、人類の発展史上に、善と悪は両方が常に存在している。文学の本質は人間性の文学で、人間性を明らかにし研究することは文学の最も重要な存在価値で、善と悪は人間性の最も重要な二つの方面で、必然的に多くの作家の関心を引く。

芥川龍之介は人間の本質は利己的で、人間性は醜いということを信じる。ただし、彼は完全に世の中の善の存在を否定しないのである。あるいは、彼の作品の中に、少なからず善良な人物がいて、しかし、最後に悪に圧倒されて悪の敗将になる。この点はちょうど芥川の悲劇的人生の本質である。彼の目には、世間は善良は不足し、力は弱く、悪が大手を振っている。

「お富の貞操」、「奉教人の死」は、善良と醜悪との闘争として書かれたものである。女中のお富は猫の命を救うために自分の貞操を乞食の新公に与え、その善良の程度は人の度肝をぬくほど、驚かせた。乞食の新公でさえも彼女に感動する。しかし、２０年の後、善良なお富は幸せな生活を得なく、かえって、新公は社会的名士になった。

「奉教人の死」の中にろおれんぞは善良である。隣の傘張の娘はろおれんぞに執着して何度も何度も誘惑をする。しかし、ろおれんぞに拒絶される。その後、傘張の娘は隣の家の同じ異教徒の男と密通して子供がいることになった。そして、この子どもはろおれんぞの子どもだという嘘をついた。ろおれんぞは弁解することもしない。追放され、屈辱と苦難んを体験しても、一言の不平もいわない。それから、火事がおき、傘張の娘の末っ子は火に囲まれ、誰でも助けない。ろおれんぞはこの末っ子を救出し、それゆえ、命を失った。この時に至って、傘張の娘は自分でろおれんぞを誣告して罪に陥れたことを切り出す。お富とろおれんぞは善良な象徴で、世界の醜悪を見なく、懸命に心からの善良で醜悪と立ち回る。ただし、最後に失敗した。実はろおれんぞの死は、芥川がこの世界に対する失望ということを象徴する。芥川の観念世界に、悪はすでに絶対の優勢を占めている。善良であることは仮に存在しても、同様に弱い無力のものになる。

「地獄変」の中の絵師良秀の娘と猿は善良な象徴である。彼らは友情を大切にして、他人の感情、心の交流を重視する。絵師の娘の善行は自分に幸運をもたらすことができなく、最後に大公は絵師の娘を火の中に送り込んで、小さな猿も命を顧みないで主人に殉じるのである。

善良に対しての失望と困惑については芥川の悲観的な人生観を育成するのである。芥川のは生活の面倒が嫌になり、その上何十年かの執筆生涯に対して、実は疲れていたと感じている。信念が崩壊し、最後に自殺という道を選んだのである。

芥川の人生観は悲観的である。それで彼の人生の経験は同様にこの悲観の人生観を形成する重要な原因の一つである。母親の狂気、父親の事業の失敗、自分の初恋の失意、彼に絶大な精神のショックを与え、厳しい神経衰弱と体力の弱さを引き起こした。精神上の寂しさが、彼を始終一人地獄で苦しめると彼は考える。この苦難を解放するため、彼は少なくない日本作家が用いた解決の道を選んだのである。

おわりに

芥川龍之介の一生、ちょうど、「地獄変」の良秀のように、悲劇の結末である。一生というのは実は３５年だけである。創作の生活は１２、１３年を超えないで、１４０くらいの短編小説、および多くの小品文、随筆、評論、詩歌などを書きだした。歴史の題材であろうと、近代的な題材であろうと、芥川は創作して以来、ずっと人間性の問題を探求している。彼は人生を探求し、人間性を掘り起こし、いつも現実的な醜さを見、生活の仕方のなさを感じ、人間の生存の世界は地獄に及ばないと感じる。極めて苦痛である。ついに未来に対するぼんやりした不安の中で、１９２７年7月２４日、ちょうど生きがいがある年齢に、睡眠薬を飲んで自殺した。彼の死は、日本の国を挙げて驚かせた。文壇はさらに悲しみに堪えなかった。単に典型的な短編小説だけでなく、日本の知識人の最も優秀な方面を代表した芥川だったからこそである。

人間性の悪の本性、矛盾に満ちた人間存在の世界および世界の善良の欠乏、醜悪の横溢、これは芥川龍之介がこの世界から獲得した結論である。獲得する過程はちょうど彼の悲観的消極的退廃的な人生観を形成した過程である。こんな人生観の形成は、芥川の家庭背景と個人の経験と時代の要素とかかわっている。宮本顕治の「敗北の文学」によれば、芥川が「困憊した神経を通して」次第に「人生に対する敗北」の意識を深めて行ったのだ、「後悔に満ちた自己批判」が、彼を死に追い詰めて行ったと述べている。

参考文献:

(1)劳雅钦.试用精神分析法探析“杜子春”的行为变化[J]. 文学教育(下)，2019(05):112-113.

(2)李璞璘.从《地狱变》看芥川龙之介之艺术人生观[J]. 安徽文学(下半月),2009(05):42-43.

(3)尹航.芥川龙之介《罗生门》中的人性冲突及利己主义思考[J].河北工程大学学报(社会科学版),2018,35(02):41-42+45.

(4)赵玉皎.从《芋粥》的构成论难以回归的日常世界[J]. 文教资料,2012(03):26-28.

(5)章明. 芥川龙之介历史小说中利己主义的多样性——以小说《罗生门》和《鼻》为例[J]. 沈阳农业大学学报(社会科学版),2013,15(05):632-634.

(6)杨笛.论芥川龙之介历史小说创作——以《罗生门》、《莽丛中》为例[J]. 六盘水师范高等专科学校学报,2011,23(01):19-22.

註

(1) 文洁若.《罗生门》，华夏出版社，2003（12）：1

(2) 近藤卫 岩田晋次 谷宽史 《新日本文学史》，京都书房，102

(3) 叶渭渠 唐月梅.《20 世纪日本文学史》，青岛出版社，2014（1）：159

(4) 『常用国語便覧』浜島書店 1981：246

(5) 『芥川龍之介』筑摩書房 1971（3）：416

(6) 『芥川龍之介』講談社版 1980（5）：480